

——改造者達即ち新時代の人々を評價する勇氣を有たうとしてゐたのである。また彼の批評は簡單に否定的である許りでなく創造的であつた。彼は一切のものが「一所に改革され」なければならぬと云ふことを悟つた。それから彼は改造の事業に従事してゐた新しい人々が、その事業に應はしいかどうかを自問した。彼は彼等が實に不適當である許りでなく、彼等は誤れる方法でその事業を行つてゐると云ふ結論に到達したのである。そこで彼は勇氣を出してさう云つた。彼は自由主義は信ずることは出来ぬけれども急進主義は信ずることは出来ぬと云ふ最初ロシア小説家である。でこれがその當時、ロシアの凡ゆる急進主義者が是認することの出来なかつた感情であり、現在でも彼等が殆ど是認することの出来ない所のものなのである。

彼の、此の中に於ける、急進主義者に就いての批評は創造的のもので、否定的のものではなかつた。故に彼は彼等の弱點と彼等が探つてゐた誤れる進路を指摘して自らを幽閉する代りに、その正道を指摘するために最善を盡したのである。ドストイエフスキイは同じやうに、同様な貝殼追放オストロフスキイを受けた。ツルゲネエフはその爲に悩んだ。併しドストイエフスキイの天才とツルゲネエフの藝術とは、一切の障壁や國境の制限を越えて仕舞つたのである。歐羅巴は彼等を喝采したのである。レス

コフの批評は一層地方的であつたので、貝殼追放はロシアに於ける彼の作品の流行を防ぐには力がなかつたけれども、一時彼を西部歐羅巴の注目から除外することには成功したのである。此の障壁は現今では破壊されてゐる。レスコフの傑作の一つ「封ぜられたる天使」は近頃英譯された。併し乍ら彼も最も土着の一人であるので、翻譯するには最も困難なる著者の一人である。

遙か一層辛辣で一層厭世的の音調は、ベゼムスキイの作品の中で聽かれる。彼は新しき民主主義に對し、古きものに對する偏愛からではなく、無慈悲に對抗するのである。彼の最も重大なる作品は「恐怖の海」(一八三二年)で、急進ロシアに向つての恐るべき突撃であつた。かくしてベゼムスキイはその厭世分析に對して、恰度レスコフがその公平に對して爲したと同じ代價を拂つた。即ち社會的追放に遭つたのである。

オストロフスキイ(一八三—一八六)の事業は演劇史に屬する。彼は舞臺に中流階級からの實際生活の一片を運んで來た。即ち町民、下級官吏、大小の商人及び惡漢、彼が青年時代に見た所の「社會」、モスコウの一商人の代理人たりし彼の父等。オストロフスキイは近代ロシアの寫實的喜劇及び演劇の開祖とも言へよう。彼が劇を書いた時代であつたに係はらず(五十年代及び六十年代)、喜劇作法の

痕蹟、トリック、効果ある幕切れは何一つとしてなく、彼は斯様にして約七十年までに、眞の近代劇の型式の先鞭をつけたのである。彼の戯曲は現今も舞臺に保持されて居り、各季節の座附演技目錄の一部を占めてゐるのである。それは、加之、讀んでも或は演ずるのを見ても、丁度同じ迫眞的印象を與へる。而もそれは歴史的或は劇的見地からと同様文學的見地から興味がある。興味があるのはそれが甚しく國民的で、ロシア語としては英語のやうに弱いからである。

その時代の大體の摘要は猶ほ他の小説家グリゴロフツチを挙げなくとも更にまだ不完全である。ペゼムスキイやレスコフよりも藝術及び創造力に就いて一層低いレベルにあつたけれども、彼は農民文學に就いてのロシア文學中の先驅者であつたのである。彼はツルゲネエフの「獵人日記」に先鞭をつけ、初めてロシアの讀者をして、その百姓に關する記錄に同情の叫びを起さしめたのである。ツルゲネエフのやうに彼は偉大なる風景畫家であつた。その「釣する人々」の中で彼は百姓と職との生活を描き、またその「田舎道」の中では懐しき往時の一つの描寫を供してゐる——豊富なる諧謔に満ちた、而も同時代のサルチヨフの踏いそして鋭い腐刻法エツチングと正確なる對照の中に。諧謔、貧しき者に就ての哀感、風景——是等が彼の重なる特質である。

第六章

トルストイとドストイェフスキイ

トルストイとドストイェフスキイとを有つて、吾々は昔に沙漠に於ける二つの巨大なる像のやうに、凡ゆる外のものの上に聳えてゐる。近代ロシア文學の二大柱に接するのみならず、世界の文學に於ける最大の二つの立物に接するのである。ロシアは世に一人のシエクスピア、ダンテ、ゲーテ、モリエール(Molière)の如き世界的詩人を與へなかつた。プウシュキンにしても、彼は無上の藝術家で且つ靈動されたる詩人ではあつたが、國境界線と國語の相異を征服する特殊の偉大性を缺き、凡ゆる國民の世俗的傳統の一部分となつてゐる仕事を生んでゐるのである。然しながら、ロシアは吾人

に實際に此のことを作品でなしたる二人の散文詩人を送つたのである。而してその間に、彼等は自らの中にロシア精神の全部とロシアの性格の殆ど全部を概括してゐるのである。私はロシアの性格の殆ど全部と云ふ。何となれば彼等はその間に最大なるもの、最も深酷なるもの及びロシア「精神」の中で最も弱きものの凡てを概括してゐるけれども、蓋し彼等がそれを充分良く理解してゐながら、彼等の天才がそれを所有することを禁じた所のロシア人の「性格」の一要素があるからである。若し諸君が成分としてビイター大帝、ドストイェフスキイのムウイシュキン——白痴で賢人よりも賢き所の純粹なる馬鹿——及びゴオルの「檢察官」の主人公なる囑言者で法螺吹きのレストラン・コフ等を探るならば、諸君は是等の要素から、嘗つて存在した凡ゆるロシア人を再造することが出来ると思ふ。即ち諸君は如何なる單なるロシア人でも、是等の要素の一つか或はそれ以上のものの何れかに混合してゐるのに氣付くのである。

譬へば、ビイター大帝にレストラン・コフの充分な分量を混じて見よ。然らば諸君はボリス・ゴドノフとバクウニンを得。ビイター大帝の要素を混合しないで取去れば諸君はバザロフ及びゴオルキイの主人公の多くを得。それに軽くレストラン・コフを混じて見よ。然らば諸君はレルモントフを得

る。レストラン・コフの要素を勝たせて見よ、然らば諸君はグリボイェドフのモルキヤリンを得る。ムウイシュキンの要素を勝たせ、レストラン・コフの一分量を混ずれば諸君は神父ガアボンを得る。それにそのレストラン・コフのその分量を無くして卓越せめて見よ、然らば諸君はオプロモフを得、それにビイター大帝を混ずれば諸君はヘルツェン、チャツキイを得る。以下同断である。その凡ゆる要素を等しく混ぜよ。然らば諸君は凡人、オネエギンを得るのである。私はこんな要素が凡ゆるロシア人に必然的に在ると云ふことではなく、その一人か或はそれ以上の何れかの中に見出されないやうなロシア人に、諸君が逢面しないことはないと云ふことを言ふ積りなのである。

楮、トルストイの中にも、ムウイシュキンの一分量と、一つの漠然ではあるがムウイシュキンの特質に對する、上首尾でない希望と共にビイター大帝の要素が入つてゐる。然るにドストイェフスキイの中にはビイター大帝の強烈なる脈と混合したムウイシュキンが入つてゐるのである。が併し兩者共に、そこにはレストラン・コフの接觸はないのである。ロシアに於て、軍人、水夫、鑄掛屋、洋服屋、富豪、貧乏人、百姓の兒或は泥棒にせよ、凡ゆる階級に絶えず起るのは、突然にその職業と天職とを去つて眞理と神とを求め初める男である。是等の男は (Bogomol) 即ち神を求めるものと云はれてゐる。

のである。トルストイに就いて全世界が知つてゐることは、その偉大にして赫奕たる藝術的生活の眞只中に在つて、文學及び藝術を放棄し地上の所有物を捨てて、眞理は百姓の如くに働くことの中に發見せらるべきであると云ひ、斯くしてトルストイ派を創造したことである。その時に世界は彼が文筆を續け、そして家庭ではその家族と従前通り生活してゐるの不合理に對して彼を責めた。併し乍ら實際にはそこには何等の不合理のものも無かつたのである。その理由は事實に於て何等の蹉跌がなかつたからである。トルストイは (Bogoiiskatel) であつて、その全生涯は眞理と神との探見者であつた。變つたのは唯その探究の態度であつて、その探索はそれ自身不變に残つてゐるのである。彼は家族の束縛のために、その死の直前まで、彼等の論理的結論に對して自己の提論を推行することが出来なかつたのである。が併しそれを彼等の論理的結論に對して最後に推行し、吾々が知つてゐるやうに、修道院への途上彼は死んだのである。

トルストイの探究態度は異常であつた。異常と云ふのは彼がそれに對して準備するに、凡ゆる物を透視することの出来る鷲の眼を備へ、またその生涯の初めの日から死んだ日に至るまで、何物でも是認されないものは探らず、常に人々、物々、觀念及びその幻象の探光に主觀的で、それが眞理

か否かを見て精査し、更に、彼は自ら此の長い人生の間の、現實の世界と觀念の世界とを通じて、何れが一般的か特殊的か、全體か部分、幻象か、パノラマ、群衆、肖像、或は微細畫かをホオマア (Homer) の強烈なる單純性とヴェラスケツ (Velasquez) の色彩と眞實性とを以て、自己の觀た所を描寫するの力を賦與されてゐたからである。これが彼を世界最大の文豪、また小説方面に於ける世界最大の藝術家たらしめたのである。彼の探究の他の特性は、彼は鷲の眼を以て追求したけれども瞥見を以てしたことである。千八百七十七年にドストエフスキイは書いた。「その巨大なる藝術的才能を有するに係らず、トルストイは自分等の眼前の正しい所ものを見て、その方面に突進する所謂一般のロシア人の一人である。彼等は一方に何が横はつてゐるかを見るためには、その首を左右に轉回するの力を有つてゐないのである。これをするためには、彼等はその全身で轉回するのである。若し彼等が轉回すると、彼等は全く恐らくは今迄公言してゐた所と正確なる反對點を保持するに至るのである。何となれば彼等は頑固に正直であるからである。」と。絶えずその全身を轉回したる人によつて、瞥見間の卓れざる洞察の眼によつて繼續されたのは此の探究で、それがトルストイの生涯の多くの明かな變化と矛盾とを辯明するのである。

矛盾の他の原因は彼の中に力を占めてゐた悪魔的要素の資質によるのである。そして彼の永久に求めてゐたのはムウイッシュキンの謙遜、即ち純粹なる馬鹿であつた。而も彼は充分謙遜たり得なかつたために、理想に到達することが出来なかつたのである。斯くして死が彼を襲つたとき、彼は最後のそして最大なる発見の航海に就いたのであつた。されば彼の一小驛に於ける死との逢面に就いては、何物か崇厳にして偉大なるものがあるのである。

トルストイの作品は此の探究の一つの長い記録であつて、彼はその記憶及び経験をその途上で蒐めたのである。彼はその作品の中のものに就いては一瑣事も、一感動の章句も、或はその精神生活に於ける一陰影或は気分でも、吾々に語つてゐないものはないのである。その「幼年、少年、及び青年」の中では、彼は自分自らの幼年、少年及び青年を必ずしも實際に在つたやうに正確にではなく改造してゐる。そこには「事實」^{ザルハイト}と同様「虚構」^{フィクション}がある。併しその「虚構」が事實のやうに眞實である。何となれば彼の目的は、その幼時の環境から受けた印象を改造しようとして居つたからである。猶ほ彼の觀察の探光はその時に於てさへ、無慈悲に、不眞實、虚偽、及び因襲的な一切のものを攻撃したのである。

その青年に關するものを完成するや否や、彼は「地主の朝」と云ふ中の一人の成人の生活に向ひ、彼が一地主の生活を如何に生きんと試みたか、またそれより如何して不満足以外のものが生れなかつたかを語つたのである。彼はコウカサスに連れて新生を求め、そして此處での探究の結果が傑作「コザツク」なのである。彼は元の世界に歸つて行く、そしてクリミア戦争に加はり、戦場に於て見たる所を描寫する。彼の鷲の眼光は戦争の「壯麗と悲惨」^{スラヴユル・ネロシセル}を従來の戦争作家よりも蓋し一層眞實に暴露するのである。が併しアルフレッド・ド・ヴィグニイ (Alfred de Vigny) より少く同情的である——その相異はアルフレッド・ド・ヴィグニイは内氣で謙遜であるのに、トルストイは、その戦争の當初、自ら書いたやうに「何等の謙遜を有たなかつた」所に在るのである。

クリミア戦争の後、彼は再び社會へ突入し、外國に旅行する。そしてロシヤへの歸途、彼はヤスナヤ・ポリアナに定住して結婚するのである。彼の小説「家庭の幸福」の主人公は結婚及び田園生活の中に、彼の内心の希望を基立したやうに見へる。彼が千八百六十五年に發表し初めた所の「戦争と平和」を書いたのはその時であつた、彼は常に十二月黨運動に就いて一つの物語を書く觀念を有つてゐたのであるから多分「戦争と平和」には、その未だ書かれざる作品に對する序論であつたのである。と云

ふのはそれはその運動が勃發した時に終つてゐるからである。「戦争と平和」の中で彼は世界に一つの近代的散文詩を與へた。それは大部分の歴史小説を傷ける所の障礙即ち明瞭に不實なるもの存在には惱まなかつた。即ちそれは彼の兩親の記憶に就いての彼自身の想ひ出に基礎を置いてゐるからであつた。彼は吾々に實際吾々が本當の眞理と感ずる所を提供する、と云ふのは先づ一つの歴史小説に於て「これは全く事實のやうだ」とか「藝術的改造の何たる駭くべき作品」と云ふ代りに吾々は吾々自身がそこに居るかのやうに感じ、それ等の人々は吾々の知つてゐるものであり、彼等は吾々實際自らの過去の一部であるからである。彼は人々の全生涯を描く。そしてピエル・ブゾウコフの中には、彼自身の探究に就いての新しき境界線が叙述されてゐる。澤山な他の挿話の中で、ロストオヴスのそののやうに、家族生活に就いてこれより以上の現實的魅惑的な描寫はどこの文學中にも存在しないし、またナタシヤより以上の生々とした魅惑的人間は何處にも存在しないのである。プウシユキンのタチアナのやうに生々した一つの創造であり、彼女は或る別種の人生で生きてゐるのであるから、ツルゲネエフの女性の描寫よりも一層確信的な一つの眞實性を以て生きてゐるのである。その相異は諸君が高尙な華麗な婦人に就いてのツルゲネエフの作品を讀むとき、諸君は諸君自らの生活

の中に諸君自身のナタシヤを知らなかつたかどうかが慥でないこと云ふ所に在る。彼女が夢と現實との混合されてゐる諸君自らの過去の國に屬して居ないと云ふことは慥である。「戦争と平和」は凡ゆる外の歴史小説を掩蔽してゐる。それは凡ゆるスタンダール (Stendhal) の迫眞と、群衆や團體を扱ふ凡ゆるゾラ (Zola) の力とを有つてゐる。譬へばフローベルの「サラムボ」(Salambo) の如き傑作を探つて見よ。それはその用語、その色彩、及びその技巧の雄壯なるによつて、事實宛も諸君の氣息を奪ふかのやうである。併し乍ら諸君はそこに描かれたる人生の中に諸君が働いてゐると云ふことは、夢にも決して感じないのである。「戦争と平和」の中で唯一片非眞實なるものはナポレオンの人物である。彼にとつてトルストイは故意に不信實であつたのである。戦争と平和の中で吾々に與へる他の印象は、實在の人物が常に同じであると云ふこと及び社會狀態の變化と云ふものは衣服の流行の變化より一層重大でないと云ふことである。それが此の關係に於て「サラムボ」を揭示しても無駄でない理由である。人は、若しトルストイにして古代ロオマに就いての一小説を書いて居つたとしたならば、吾々は彼の記録からシセロを知ることよりも寧ろ一層良く、貴族・元老、法學者、人民、辯論、看護婦長、高等内侍の種類を理解して居り、吾々は唯單に「シセロ」を「知つて

居る」と云ふことを思ふ許りでなく、實際に彼を知つて居つたと感じたに異いないと云ふことを考へるのである。此の實際の仕事即ち——異教の歴史から一頁を再建すると云ふこと——は後年メレヅコフスキイによつて企劃されようとして居つた。が併し彼の事業は燦然たるものはあるが、唯時にそして閃光によつてトルストイの信服するやうな力に到達するだけである。

アンナ・カレニナは千八百七十五年—七十六年に現はれた。で此處ではトルストイは、ヴェラスクエツの筆觸を以て偉大なる畫布の上に、セント・ペイタアスブルグ及び田舎に於ける同時代の上流階級の生活を描いてゐるのである。その主人公レヴィンは彼自身である。此處ではまた、自然と現實とに對する眞實さが非常に嚴烈で迫眞的であるので、ロシアに慣れてゐない讀者はそれを讀んで少しもロシアを想ひ出さず、それが何であるにせよ、自分自身の國で起つた物語だと想像するのである。彼は諸君に一切のものを外部からと同様内部から示見するのである。諸君は競馬の描寫の中でアンナが觀ながら何を思つてゐるか、或はウロンスキイが馬上にあつて何を思つてゐるかを考へる。そして全く無比な巧妙さでアンナのウロンスキイに對する戀愛の漸次的曙光が描寫されてゐるのである。彼女の傲奢な、そして卓越せる夫が如何に痛しき實在の人間であるか。また夫の元を去つて

仕舞つてからの、彼女の戀愛事件に於ける凡ゆる出來事、彼女の子供訪問、オペラへの出現、彼女が世間を輕蔑し次第に易激性になつて行くこと等がその最後のキタストロフに至るまで、本當にそんな風に實際にあつたに異ひないと云ふ所の或る種の極印を押してゐるのである。

併し乍らトルストイ自身の顯出の關係してゐる所では、レヴィンはその作中最も興味ある型である。此の人物はトルストイの眞理探究の他の目標である。彼は絶えず受け入れたる思想を試し、死に就いての肉體的恐怖それ自體のためではなく、死と直面すると生活の全體が無意義なものになるかも知なれいと云ふので、彼は突然の此の恐怖に心を悩まされてゐる。一人の百姓が彼のために新しき門戸を開き、その問題に對する解決を彼に供する——自己の魂のために生きるとき、生活はも早や無意義とは思はれない。

斯くの如くレヴィンは、その唯物主義の拋棄と教會内での眞理探究に就いてのトルストイの發展の行程を表示するのである。併しその教會は彼を満足せしめない。彼はその獨斷と儀典とを攻撃し、福音書に向ふ。併し決して受け入れることはしないで、それを修正するのである。彼はキリスト教は從來教へられて來たやうでは單なる狂氣である、故に教會は無駄な時代錯誤であると云ふ結論に

達する。斯くして他の變動が行つて来る。それは普通にトルストイの生活を半截する變動と見做されてゐるのであるが、實際にはそれは瞥見の中に眞理を探究する人間の一つの新しい反動なのである。その「告白」の中で彼は云ふ。「私は私自身を嫌ふやうになつた。而も今は一切が明瞭になつて来たのである。」と。彼は所有と云ふものは一切の罪惡の原因であつたと信するやうになつた。彼は文字通りに自分の有つてゐた一切を抛棄しやうと望んでゐた。これは彼には爲ることが出来なかつた。最後に彼を尻込みさせたのは獻身的行爲ではなくして、自己に餘りに強く結ばれたる、環境と家族とであつた。併し乍らその生涯の最後の日に於ける家庭よりの終局的遁逃は、その願望が決して彼から去らなかつたことを示してゐるのである。

藝術も亦彼自身の作品及び他人の作品と共に、彼の新しき標準に對しては卑下せられそして缺陷を發見されたのである。シエクスピアとベエトオヴエンは忽ち處分されて仕舞ひ、彼は自分の多くの傑作を無價値のものと宣言したのである。これは何よりもその人間の傲慢を示してゐるのである。彼は誰をも、否自分自身さへも尊敬することが出来なかつた。彼は自分に與へられた天賦及び最大の人間に與へられた最大の才賦を輕蔑したのである。併し乍らトルストイの發展に就いての此の目

標、即ち彼の教會及びその制作への復歸はロシヤの藝術に於けると同様、ロシヤ史に於ける一つの目標である。何となればこれより遙かに劣れる、高い地位に在る思想家や作家達が投獄されたり流謫されて居つたからである。何人と雖も敢てトルストイに手を觸るゝ者はなかつた。彼は恐れなく、一つの反動時代に、形而上及び政治上の兩方面の既成權威に挑戦した。そして官僚ロシヤが一本の指をも擧げなかつた位の威信があつたのである。彼の權威は餘りに偉大過ぎた、でこれは蓋しロシヤに於ける官僚暴政に對する個人的思想の自由に就いての最初の大勝利なのである。以前には數多くの殉教者はあつた、が併し一人の戦勝者もなかつたのである。

「アンナ・カレニナ」の後、一時文學を諦めたがほんの一時だけで、トルストイはまた書くことを續けたのである。最初は唯子供のための物語と神學上の、及び論争的のパンフレットを書いた、が千八百八十六年には恐るべき力ある農民劇「暗の力」を發表した。これより以後に「クルツェル・ソナタ」、「イヴン・イリツチの死」及び「復活」が現はれた。此の中の主人公ネエフルウドフはトルストイ自身の死せる幽霊であつて、その挿話と細述とはその女主人公マスコヴァが有つてゐるやうに、彼の初期の作品の眞實性を有するのである。併し乍ら彼は獄屋の醜惡と悲慘とに於てはドストイェフ

スキイが爲したやうな、人道と愛に就いての何等尊き慰安物を示さないものである。そしてその作は「戦争と平和」の醇香と史詩的轉回、乃至は「アンナ・カレニナ」の充分なる完璧をもまた有つてゐないのである。彼の死後に幾つかの作品が發表された。その中には小説であつて、また劇なる「生ける屍」がある。彼は今迄生きて來たやうに、尙ほも探究しながら、そして多分その終焉に於て自己の探究の對照を發見して死んだのである。

トルストイは、プウシュキンよりも猶一層土に根差して居つたので、凡て土のものでないものは——神秘的或は超自然的の凡ゆるもの——全く彼には無關係であつた。彼は曲る事の出來なかつた樞であり、事實さうだつたやうに寫實的假作譚の帝王であつて、繪畫や肖像や人物や物に就いての無比なる畫家であり、人間の心を洞察する解剖學者であつて、巨大なる型の中に投ぜられたる天才であり、彼の作品はその内容とその藝術的力との兩者に依つてその故國を越えて一勢力を運び、凡ゆる歐羅巴の國民達を心酔させ、彼に世界の偉大なる作家の中の一地位を提與したのである。トルストイは叛逆者ではなかつたが異教徒であつた。が併し簡單に宗教及び教會にとつての異教徒であつた許りでなく、哲學、論說、美術及び食物に於てさへ異教徒であつた。併し乍ら世界が彼に就いて

記憶する所は、彼の異教的神學にあらでその忠信なる實行であつて、それは最高の聖典に對するその服從に於て、ホオマア及びシエクスピアが正教徒であると同様に正教徒であつて、彼等のものやうに正常正銘なる地上最大の範例の一つなのである。

ドストイエフスキイをトルストイに反對なるものでロシヤ散文學の第二の大柱と云つても、今では誰でも驚くものはあるまい。若し十年前に書いて居た人が斯様な説を發表したとするならば、イギリスのロシヤ文學の讀者の大部分の間では不信の嗤笑に逢面したであらう。と云ふのはドストイエフスキイは實際にはその「罪と罰」を除いては知られて居らず、且つ彼をツルゲネエフと比較することは聖瀆的なことと見做されてゐたからである。今やドストイエフスキイが吾々知識階級の常套語の一つとなつてゐる際、世人は誤解してゐた氣遣ひを忘れて傲然と云ふことが出来る、文學に於ける創造者として、また勢力としてドストイエフスキイはツルゲネエフのそれとは別の方面に在つて、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) ヴァンダイク (Vandyke) より一層偉大であると同様、或はワグナー (Wagner) がグノウ (Gounod) より一層偉大なると同様、遙かに彼より偉大である、と。同時に或るロシヤ人達は彼をトルストイよりも無限に一層偉大であるとさへ考へ

てゐるのである。吾々は彼をトルストイの同等者で補成者であると云ひたい。彼は凡ゆる場合殆ど凡ゆる點に於て、トルストイの反對者である。トルストイは健康の化身であつた。そして就中明かに正銘なそして世界的な畫家である。ドストイェフスキイは顛癪持であつて、變態なる人、罪人、狂人、墮落者、神秘家等に就いての畫家であつた。トルストイは大家族の眞唯中に居て過不足なき美しき生涯を送り、自分の故郷でその大部分を送つた。ドストイェフスキイは死刑を宣告され、シベリヤの監獄に於て四箇年の過酷労働の宣告を勤め、此の外六ヶ年を放浪に暮し、歸つて新聞に携はつたとき、それは監督官によつて禁止され、彼が向つた二度目の新聞は悲哀に遭遇し、彼は財政上の破滅に陥り、彼の最初の妻、兄弟、最上の友は死し、彼は負債のために外國に追はれ、一方官憲に惱まされ、また他方自由主義者に挑戦せられ、非難され、誤解され、殆ど飢渴し生活は苦しく、過度の難澁の下に働き、常に時代のために壓迫され、そしてその労働に對して疾病を酬ひられた。それがドストイェフスキイの生涯である。

トルストイは異教徒で、最初は唯物主義者、それから次に自分自らの宗教の探索者となり、ドストイェフスキイは實行的信者即ち正教の熱烈なる使徒であつて教會の聖莫に護られて死んだ。トル

ストイはその廣大な非宗教的主張を有つて居て心狭な人であつた。ドストイェフスキイはその限定的な宗教的主張を有つて居て從來生存したる最も博心の人であつた。トルストイは超自然なものを嫌つた。そして凡ての神秘思想に關しては外國人であつた。ドストイェフスキイは他の如何なる作家よりも、知られざるもの、肉體の彼方に横はる所のものを一層近くに獲得するやうに見へる。トルストイの中にはロシア人の特徴なるピイター大帝の要素が大部分を占めてゐるが、ドストイェフスキイの中には純粹なる馬鹿、ムウイシュキンのそれが大部分を占めてゐた。トルストイは自分自ら屈從したり謙遜であることは決して出来なかつた。屈從と謙讓と諦觀はドストイェフスキイの本調子であり、主流である。トルストイは藝術を輕蔑した。そして如何なる偉大なる文學の名聲に就いても何等の尊敬を拂はなかつた、而もこれは唯所謂回轉機の後ばかりではなかつた。千八百六十二年の早期に、彼はプウシュキンとベエトオヴエンとはその絶體美なるの理由で満足することが出来ないことと云ふことを云つた。ドストイェフスキイはカソリック教徒であつて、世界人であり外國文學を尊敬した——シエクスピアと同様にラシヌ (Racine) を、シルレル (Schiller) と同様にコオルネユ (Cornelle) を、トルストイの本質は壯大なる頑迷であり、ドストイェフスキイの本質は醇

然たる合理である。トルストイは總て自分の所有してゐたものを棄て、百姓のやうに生きることを夢想し、ドストイェフスキイは最下級の罪人の過酷労働を分擔しなければならなかつた。トルストイは食物の分配に就いて理論した。が併しドストイェフスキイは乞食のやうに食はせられた。トルストイは潤澤の中に在つて閑時に書き、その作品を書き直ほし、ドストイェフスキイは始終時代のために壓迫され、始終金の必要に泣きながら、その日のパンのために文學賣物文士のやうに働いたのである。

是等の對照はトルストイの悔蕩を作すものではなくして、單にその二人の間の、そしてその境遇間の相異を指示するものなのである。トルストイはその生涯の當初より終局まで自分自身に就いて書き、殆どその作品の總ては自叙傳的であつて、殆ど常に凡ゆるその作品の中で自分自らを描出する。吾々はその作品からはドストイェフスキイに就いては何物をも知ることはないのである。彼は利他主義者であつて、自分自身よりもより良く他人を愛したのである。

千八百四十六年に發表されたドストイェフスキイの最初の作「貧しき人々」はゴオゴルの「外套」の傳來物であつて、軽い範圍でゴオゴルの影響を蒙つてゐるのである。此の中に於ける、一人の年少

の下級官吏が窮乏と闘ひながら、同様貧境にある一少女と相知つて一脈の光明を發見する、が併し彼女が終局に一人の富有な中年男と結婚する物語では、吾々は既に凡ゆるドストイェフスキイの特殊の芳香を得るのである。ステイブンソン (Stevenson) が彼の「愛らしき善良」と呼んだのは、彼の殆ど堪えられざる悲哀、その人生の廢嫡者、敗慘者に就いての彼の愛なのである。彼のその次の作「死の家の記録」は更に一層の宇宙的興味を有つてゐる。それは彼の牢獄經驗であつて、それは單にその放熱的道德上の美、その惡なるものの中に於ける善良なる魂の絶間なき發見、その人間的胞愛、その自己主義と難詰との缺無、及びその感動的なる人間的同情のため許りでなく、またそれがロシアの國民性、ロシアの貧乏人、及びロシアの農民に投げるその光明のために、高貴なる價値を有するのである。

千八百六十六年にドストイェフスキイを有名にした所の「罪と罰」が現はれた。此の作は、ドストイェフスキイの「マクベス」であり佛英の翻譯で非常によく知られてゐるので、殆ど何等の註解を必要としないのである。「その行爲が機械的に強行され、彼の着物の斷片及び細片によつて捕へられたのは、宛も彼がその動作に於て機構にすぎたかのやうである。」とブリュクナア教授の云ふやうに

その老婦人を殺して仕舞つてからのラスコルニコフの心中に沸騰せる煩悶以上に恐ろしきものを、ドストイェフスキイは他に決して書かなかつたのである。そして營單に次第に變つて行く希望、恐怖、疑惑によつて恍惚としてゐる人間、及びラスコルニコフが經驗する種々の新しき悲痛ばかりでなく、その作中の凡ゆる傍流的人物の魂が全く明快に吾々に啓示されてゐるのである。マルメラドオフの家族、正直なるラズミキン、巡査、及びセント・ピイタスブルグに於ける水の氾濫する十月の零圍氣——夏のその市の霧深き飄感等。ラスコオルニコフが淫賣婦ソニヤの前に脆いて彼女に談しかける時に一挿話がある。「俺が脆いてゐるのはお前の前にじやないのだ。凡ゆる人類の苦痛の前なのだ。」それがドストイェスキイが此の中で、及びその凡ゆる作の中で爲してゐる所のものなのであつて、より以上な生氣ある彩色で吾々の前に作出する凡ゆる人類の苦痛は、それ等の作品の中には他にないのである。またその中のどれにも無いのは、一層感動的なるもの前に脆くときの彼の尊敬の行爲である。

此の作は以前には「心理學的小説」と云ふ發明語で呼ばれて居た。が併し後年ブウルジエ(Bourjé)や其他の人々によつて書かれた所の凡ゆる心理學的小説は、血と涙で書かれた此の記録の前

には如何に蒼然たるものがあるではないか！「罪と罰」に次いで「白痴」が出た。その白痴は既に言及したる賢き馬鹿でまた癲癩症なるムウイシュキンであつて、彼の中では皮肉と尊大と利己主義とは絶滅されて居り、彼の單純性は惡の園即ち嘘言者、惡漢、泥棒の世界を無傷に通過させ、その中の誰一人として彼の放光的人格の感化を遁れることの出来るものはない。彼は彼が遭遇する凡ゆる人間と同じであつて、疑心なき眞摯と至善の直観とを交合してゐるのである。それ故に彼は人を通して觀、その心を読むことが出来るのである。此の性格の中に、ドストイェフスキイは凡ゆる彼の芳香を容入した。それは彼自身の肖像ではなくて、彼が望みたいと望んでゐた所の肖像である、故に彼の中の凡ゆる至上のものが反映してゐるのである。ムウイシュキンと對比するのは無教養な情熱の化身であつて、最後に彼が愛してゐるまた激情の動物なるナスタシヤを殺して仕舞ふ、商人ロゴオデンである——その理由は彼は本當に充分に彼女を我物となすことが到底出来ないと思へるからである。そのキタストロフ、即ちロゴオデンがナスタシヤを殺して仕舞つてからの夜の描寫は文學中他に何物と雖も之を並ぶものはないのである。詳細無限の迫眞、即ち偉大なる啓示の廣さを有つた無限は、正しくその中に在る諸君をしてその魂の縫眼に耳を敏しむるのである。その作の中では

つまらない人物も亦皆目立つて居り、その中の一人なる將車の妻エバンチン夫人は叙述し難き、そして劇的な魅力を有つてゐるのである。

「白痴」に次いだ「憑かれたもの」即ち「悪靈」は千八百七十一年—七十二年に出版されたものであつて、憑かれたものを残して、貪慾者に變つた聖ルカ傳中の悪靈に因んでさう呼ばれたのである。その作中の悪靈とは千八百六十二年と千八百六十九年との間の虛無主義の従者なのである。その中でドストイェフスキイは餘程後年に出て來た人々のと同じな、そして同一同上の罪を犯した、同一同上の人物を千八百七十一年及びその後には尙ほ創造したのである。その全卷は理想主義者の被詐者や門徒の一團なる多くの弱點を有つたものが、無遠慮で非天才で頑固な意志を有つた無漢に利用されたことで結末になつてゐるのである。彼等の中の一人は零落者であり、彼等の一人は「時」としては永久に、一切の強固なる思想が倏忽たる思想を打撃しまた彼の意志を殲滅して仕舞ふ」所の夫の理想主義者の一人である。彼等の中の一人は狂人であつて、その單純なる思想は、生も死も何れも人間にとつて些細なものになるとき、そしてまた自殺するときには恐れのためにでなく恐怖を殺すために彼が準備するやうになるとき、彼が來るだらうと考へてゐる所の超人の產物なのである。その人

間は神である。神人でなくして、人神である。ネカエフに基礎を置いた實際生活の虛無主義者であり、無遠慮な先導者なるビイター・ヴェルコヴエンスキイの計畫は、騒動を興してその騒動の中で權威を奪取することである。彼は自分がその代表者たらんと夢見てゐる中央委員會を想像し、小さな地方委員會を組織し、自分が詐つた者達に同じやうな小さな委員會の網脈を全ロシアに置くやうに説破する。彼等の目的は凡ゆる所に存在してゐる所の凡ゆる新地區に居る人々を説伏せて、次第にそれを役立てることにあるのである。

斯くの如く、その作の思想は虛無主義の勢力と云ふものが、廣大で良く組織せられた社會によつて保持されてゐる高い主義や學說の中にはなくして、その力と弱さ、及びその實際一面生なるがために必然的に弱かつた所の、賤民の理想の一面性を利用する弱き賤民の上に反動する一人或は二人の人間の意志の力の中に在る事を示さうとしたのであつた。永遠の團結をその部下と結ぶために、ヴェルコヴエンスキイは、その團員の一人によつて保有されてゐる、自殺と超人の「定期」^{イデイ・フィクセ}を利用して、團員に自殺以前に罪を犯すことを誘説し、かくして密偵として代表されてゐる所のその委員會の他の會員と共に後片附けをして仕舞ふ。一度これが實施されると、その全委員は合同的に責任を帯び、血

と恐怖との束紐によつて彼に結びつけられるやうになると云ふのである。併し乍らヴェルコヴェンスキイはその作の主人公ではない。その主人公はスタフロデンであつて、その人格の力の理由で、ヴェルコヴェンスキイは自分のかるたの切札と尊敬してゐるのである。彼の人格はヴェルコヴェンスキイに最過度の放縱を行はせ、また同時に氷のやうに冷たくさせるのである。併しヴェルコヴェンスキイの全意志はスタフロデンの人格を滅茶々にし、既に前に擧げた殺人者は罪せられ、その全體の奸策は水泡に歸し、陰謀者は發見せられる、さうしてピイターは外國に遁れるのである。

千八百七十一年「黒靈」が現はれたとき、それは一つの偉大なる暗示として仰望された。が併しそれに次ぐ數年間の實際生活は、ドストイェフスキイの假作譚より以上に駭くべき所の同種の人物達と事件とを生まうとして居つたのである。その作はドストイェフスキイのものゝ中では一番不出來なものである。その會話は斷續して居り、またその事件椿事人物が余り一箇所に蒐中してゐるので、その一般の効果が混亂して居るのである。一方それはドストイェフスキイの能く卓越してゐない所の孤立の場面を含有して居る。故にその力に於てまたその限界に於て蓋しそれは彼の最も特殊な作品なのである。

千八百七十三年—八十年からドストイェフスキイは新聞に立歸つた。そしてその「一作家の日記」を書き、その中で彼は時事問題を評論した。千八百八十年に彼は或る共同的熱狂團體に於けるブウシユキンの記念碑の除幕の際になした演説によつて、凡ての戰闘的敵愾的團體及び輿論の影師と結んだのである。七十年の終りに、彼は既に取掛つてゐた作「カラマゾフの兄弟」に立歸つた。それは彼の著作中最も長いものとされてゐるけれども、完成されなかつたのである。それはデイミトリ、イヴン、及びアリヨシヤの三人の兄弟の物語である。彼等の父は犬儒主義の感情家である。その長兄は無方針な、熱情的性格であつて、彼は苦痛によつてその熱を償つてゐる。第二番目の兄は唯物主義であつて、彼の内部生活の悲劇がその作品の大部分を形造つてゐるのである。末弟のアリヨシヤは人類の愛人であつて、神と人との信仰家である。彼は或る僧院を訪れる。併し彼の宗教上の父は、生きるために、また苦しむために彼を社會に送るのである。彼は世の熔爐を通過し、そして多くの事柄を経験しに行かうとしてゐる。と云ふのは彼の中にも亦その家族の中に在る所の食糞の微生物があるからである。その作は「偉大なる罪人の歴史」と呼ばれて居り、その罪人はアリヨシヤたらんとして居つたのである。併しながらドストイェフスキイはその主題の、この部分

に到達さへしない裡に死んだのである。

彼は千八百八十一年一月に死んだ。凡ゆる種類のそして凡ゆる階級の男女の群衆がその葬式に加はつた。そして博大眞摯なる悲痛が表明され、それに（葬式）に殆ど神秘的偉大さを與へた。民衆は從來僅か二三の王或は英雄に爲されたやうな葬式を彼に與へたのである。世人は論争或は反駁の恐れなく今や、ドストイエフスキイのロシア文學に於ける他位が最高のものであり、その偉大さに於ては或る説ではトルストイのそれと等しいか、或は寧ろ勝れてゐると云ふことが出来るのである。彼はまたトルストイのやうな理由ではなくして、世界が從來産んだ最大の作家の一人である。彼は人生を眞剣に見、そしてそれを觀て、またそれをヴェラスクエツのやうな優れたるそして平易なる技術を以て描いたのである。またツルゲネエフのやうな理由ではなく世界が生んだ最大の作家の一人であつて、彼は音樂的言葉に優麗なる繪畫を織り混ぜたのである。ドストイエフスキイは美術家ではなかつた。彼の作品は無型であり、その作品は花崗岩と鐵渣と、金と鑽石とが混合してゐる所の採石場のやうである。彼は文體に何等の注意を拂はなかつた。それなのに而も、彼の語つた言葉は非常に強烈で生氣的であるので、モスコウ藝術劇場が「カラマゾフの兄弟」及び「惡靈」の或る數場

面を舞臺に上せるのに、一つの單純なシラブルさへも變更することの出来ないのに氣付いたのである。また時として、彼の言葉はその言葉以上の力即ち單に音樂のみがする所の力を有つ。ドストイエフスキイがその精神の煩悶を表現してゐるところの諸頁は、ワグナーが死につゝあるトリストラム (Tristan) の人事不省を表現したのと同様な作法がある。自分は實はその事は他方に譲つて、トリストラムの最後の場面にて、ワグナーはドストイエフスキイのやうに偉大であると云ひたい。併し乍らドストイエフスキイは教訓的なるが爲めにでもなく、説教によるためでもなく高價な香油のやうに、彼が創造する人物より發する所の善良さによつて、彼が與へる神聖なる使命のために、偉大である。何となれば世界中の凡ゆる他の書物より以上に彼の作品は、常に教訓に慈悲とを反映する許りでなく、その語調と福音書中に在る神聖なる愛の大氣とを反映するからである。

「私は今習慣や月並に、いえ生きてゐる肉體の仲介でああなたにお話してゐるではありません。あなたの靈魂に話してゐるのは私の靈魂です、お互が恰度墓場を通つて來たのです。そして私共は神の御足下に立つたのです、平等に——現在のやうに！」シャルロット・ブロンテの「ジェーン・エヤー」の是等の言葉は、ドストイエフスキイの作品の爲す所を現はしてゐる。彼の靈魂は吾々の靈魂に

は話しかけるのである。「人を審判く勿れ。心低き愛は暴力よりも一層効果ある恐るべき力であるのじや。唯自動的の愛のみが信仰を生むのじや。人々を愛し、してその罪を恐れてはならぬのじや。その罪に於て人を愛せよ。凡て神の造り給へるものを愛せよ。して自らを愉快ならしめに神に祈るのじや。子供のやうに、してまた小鳥のやうに愉快で居るのじや。」これが長老ゾシマのアリヨシヤに對する注告であつた。そしてそれがドストイェフスキイの人類に對する要點なのである。「人生は」また長老ゾシマはアリヨシヤに云ふ「お前に多くの不幸を齎すであらう、だがお前はその爲めに幸福なのだ。してお前は生活を祝し、また他の者にそれを祝さしめるのじや。」此處に吾々はドストイェフスキイの偉大さの全秘訣を有つ。彼は人生を祝した。そして彼は他の人々にそれを祝さしめたのである。

彼の人物達が變態であると云ふことには異議が有る。彼は癲癪症、神經衰弱症、犯罪者、感情家、狂人等の疾病を取扱ふ。が併し彼が人生に與へた祝福に對する非常に大きな力と價值とを與へる所は正に此の事實なのであつて、彼が他人をして人生を祝せしめるのは此の事實によるのである。と云ふのは彼は人生地獄の最下等の社會に投ぜられ、人道からの拒絶と、人々からの酷遇と、最も不幸な

るものと共に投げ出され、人間の魂を拷問臺の上に見、また人間の靈魂を苦しめる所の最悪なる疾病を知り、恐怖と瞥見もなく惡に直面し、そして其處、地獄の中の汚塵と灰の中で、神聖なる足跡と善の芳香との印痕とを認め「主よ讃むべきかな、汝は正義なり！」とその深淵より叫び、さうして人生を祝福したからである。彼の人格が殆ど全く彼の作品の一つに在る「虐げられ、愧しめられし人々」から、また時には變態な身分から取られたと云ふのは事實である。さり乍ら大作家が人間の魂の堀り得る所の最大の冒険と最深の經驗とを啓示することに莅むとき、正常な型を探ることはその人にとつて無駄なことであり、それは何等の冒険を有しないのである。フォルテンブラス (Foltenbrass) の魂の冒険は人類にとつて何等の助けにもならないであらう。併し乍らハムレット (Hamlet) の冒険は、またドン・キホーテ (Don Quixote) の冒険は、人類にとつての救ひである。而もドン・キホーテもハムレットも何れも正常な型ではないのである。

ドストイェフスキイは人生及び靈魂の悲劇を書いた。そしてこれを書くために、彼はハムレットの理性を震撼せしめたるリヤ王 (King Lear) の擾亂せる理性、及びオエディプス (Oedipus) を自ら盲目ならしめた如き、そのやうな恐るべき境遇を擇んだのである。彼の作品はそれが提與する精神的

冒険の壯大によつてギリシヤの悲劇に似てゐる。それがギリシヤの悲劇と似てゐないのは、それより出て行くキリスト教的慈悲と信仰と希望とである。それは決して失望を以てせず、勇氣を以て讀者を感動する。ドストイェフスキイは惡の最極端と直面するけれども、決してそれに隠れやうとしたり或はそれを避けることをしない。そして唯その中に於ける善良なる魂を探ねるのである。彼は探ねて無駄をしなかつた。そして丁度、彼がシペリヤへの途上或る獄囚と交した會話が、その獄囚に生きて行くこと及び刑の服役に直面することさへ出来る所の感情を持たせ、その獄囚を感動せしめたやうに、ドストイェフスキイの作品は、人類へ放熱の國からの希望の傳信としてやつて來るのである。それが彼の特殊的偉大を構成する所以である。

第七章

第二の詩の時代

モ千八百五十年、六十年及び七十年は、歐羅巴を擧げて、高踏派の詩の時代であつた。イギリスではテニソンがその「情熱のそして申分なき音律」を放出して居り、マッシュウ・アーノルドは彼の明亮なる琴を弾じ、またラファエル前派がその錦綾の夢を織つてゐた。フランスではゴオチエ (Gautier) がその玉石を彫つて居り、バンヴィユ (Banville) のをだまきと道化役とが、コロオ (Corot) の銀色の薄明の中のワットウ擬ひ (Watteau-like) の舞臺の上で踊つて居り、ポウドレエル (Baudelaire) は燻んだ青銅の上で働いてゐた。陰氣な紛議審理會員はその象牙の七絃琴を鳴し、そしてコン

ト・ド・リール (Leconte de Lisle) は彼の黄金の貨幣を發行しやうとして居た。それは詩壇では藝術のための藝術の時代であつた。

ロシア詩壇は世界の趨勢から免れなかつた。が併しロシアでは凡ゆるものが、詩壇それも殊に嗜濫たる詩壇に投入されやうとして居つたのである。第一に、非常に壯大なる事件が起りつゝあつた——擴大なる改造、農奴解放、虛無思想の勃興で、それは改造の結果の失望の生産であつた。第二にチエルニシエフスキイ、ピサレフ、及びドロリウボフの勢力下の全く現實的な積極主義者は、單に人生のための藝術を説かないのみか、絶體的詩の無用をさへ唱へたのである。それから第三に優秀な種類の作品は説話的假作譯で書かれやうとして居り、第四にその天才が國民的希望を興さしめる程充分に偉大なる豫言者的詩人が到來しなかつたことである。凡てこれが詩を蔭影に投じるやうになつたのであつて、本當に實在してゐた詩人は、一つの顯著なる例外を有てる高踏派詩人であつて、その才能は人生の濁流より高く離れて居り、彼等は夢幻的な音樂の中、或は精美なる形式と色彩との兩者の中に、熱動的で藝術的たりし所の彼等の靈魂の冒險を表現することを求めたのである。此の詩の怠慢は丁度七十年代の終りまで續いた。併し乍ら、八十年代に入ると政治的危機の波浪はそ

の最高層に達し、アレキサンダー二世の暗殺の後、流動せぬ反動の海の中に捲き返へされ、從來怠慢で落付いて始終唄つてゐた詩人達は再び見出された。そして詩の領域は時の進むに連れて昇騰し續けた。斯くして六十年代の詩人達はその當然の價値の報酬を刈取つたのである。

此の怠慢が如何に擴大な、また深酷なものであつたかと云ふ證據は、プウシキンよりも四才若くまたゲエテの死んだ時に三十才であつたチュウチエフの作品の如何なるものでも、千八百五十四年までは何等の注目に引かず、非常に後年に至るまで何等一般の鑑賞に遭遇しなかつたことである。彼は千八百七十三年まで生き暢びた。故に彼は高踏派の創始者を云ふことが出来るのである。政治的には、彼はスラブ愛好者であつて、ロシアの民衆の「諦め」と「長き苦痛」とを歌ひ、彼はそれを西方の頑固なるものより良いとしたのである。併し乍ら彼の作品の價値の一層少くない所は、その思想の深さと抒情的感情との中即ち彼が自然に就いて與へるその想像と、その假想的影像に就いての憂鬱なる前兆との對照の間に於けるよりも、そのスラブ愛好の熱望の中である。彼の詩は不吉な夕立雲を有つた、その中からは虹と日光箭とが露に濕つた果樹園に降り、またそれに銀色の笑ひを點する春の日のやうである。彼の詩は、一方人間の運命及び無爲の影像とに於ける前兆と恐怖とで

満ち、また他方それは春の涼爽と日光の上の小鳥のやうに囀鳴するのである。彼は幾度も幾度も春を歌ふ。而も從來如何なるロシア詩人でもその榮光その神秘その不可思議、及び夜の恐怖を彼が歌つたやうに歌つたものはないのである。彼の全體の作品は輝ける自然の景色と熱望と、云ふに言はれぬ夢の世界との結び付いたものである。その入口にチュウチェフが立つてゐた高踏派時代の夢の領土は、一層荒々しくそして一層強烈なる音樂の音律によつて破られやうとして居たのである。

ネクラゾフ(一八二一—七〇)はロシアの「最も峻嚴なる畫家」であり、また慥かにその至上者の一人であつて、その印象を直接に生活から引き、そして苦痛を快樂を、また人々の生活を歌つたのである。彼は、ロシアのクラブであり、自然と人とは彼の主題なのである。併し乍ら人間の友及び敵としての自然は、一個の原動力として人間の生活の中で最も重要な要因であつて、そこからはシェリイ(Shelley)のやうな人が生きてゐる人間よりも一層眞實なる型を引き出すことが出来、或はウオーズウォースのやうな人が内的觀察の收穫を刈ることの出来る一つの理想的な納屋のやうなものではないのである。彼は自分の詩想を「復酬と悲哀の詩想」と呼んだ。彼はクラブのやうに強硬なる寫實主義者であつて、また農民の生活に就いてのその描寫の中では、何物も理想化さないもの

はないのである。クラブのやうに彼は悲哀に就いての深酷なる音律と、風景に對する一つの鋭い併し余り微細ではない觀察とを有つてゐるのである。

他方、彼は時にその描寫に於て、丁度譬へば「赤鼻の霜」と云ふその詩に於けるやうに、幻想的崇高に達するのである。そこでは霜の王が冬の森の中で働いてゐる或る百姓の寡婦に近付き彼女を凍死せしめるのである。恰度ダリヤが次第に凍枯して仕舞ふやうに、その霜は戰士のやうに彼女に近づく。さうしてその假象と屬性とは駭くべき詩節の中に引かれてゐるのである。彼は自分は富むだから如何なる浪費をしても減びないこと、及び銀やダイヤモンドや眞珠を有つてゐる自分の王國に就いて彼女に對つて歌ふ。それから彼女が凍えるとき、彼女は暑い夏の日及びばらばらい麥の收穫や懐しい歌に就いての夢を見る——

「彼女は流れに身を委せ、

歌ひながらに高く昇り行く、

吾等が夢に聽く如き、

斯くも芳しき歌は世になし。」

彼の最も長きそして覇氣ある作品は、通俗的な響鳴と音調とを有する短章で書かれた「ロシアでは誰が幸福か」と云ふ通俗史詩の一種類であつた。數人の農夫がロシアで幸福な人間を探し出すために巡禮に出掛ける。彼等は一つの魔術の絨氈の上に飛び上る。そして社會の各異れる階級の代表者、法王、地主、百姓女を引見し各新しい會見が、時には收歌的の、そして時には悲劇的の、全體の物語の連鎖を生んで居り、そして一切はロシア人の生活の雜多な時代の模畫のやうにその天才を示して居るのである。此處で再びクラップに關する類推それ自體が暗示するのは、ネクラゾオフの物語を探り、その二國間の相異を思考の中に入れると、その内容、その多様性、その嚴酷なる寫實主義、その哀感、その苦痛及びその自然の觀察に於て、共にクラップの詩に於ける物語と著しい近似を有つてゐることである。

ネクラゾオフの二つの長詩の語る物語は回想の形式であつて——こゝでは亦語法の自然さと固有性とは完全である——ロシアの婦人即ち十二月黨の叛亂に加はり、刑の服役を罪定されたその夫選に従つてシベリヤに行つた、ヴォルユオンスキイ公爵夫人及びツルベッコイ公爵夫人に關するものである。こゝでまたもネクラゾオフは、その物語がよつて語られてゐる絶體的の單純性よりの全

く鋭烈な、一つの深酷痛烈なる哀感の旋律を打つてゐるのである。ネクラゾオフは當時の高踏派の中に抜んで居り、吾々がこれより述べんとする所の唯一人の競争者のみを有するのである。

高踏派は三人の詩人、マイコフ(Майков)、フェット(Фетт)、及びボロンスキイによつて代表されて居り、三人共に千八百四十年に、殆ど同時に書き初めたのである。是等の三人の詩人は何れも教訓的ではなく、三人共に皆政治的或は社會的問題から超然として居つたのである。マイコフは古典的詩題、伊太利、それから又民謡に引きつけられてゐる。併し乍ら彼の力はその塑造的型、その色彩、及びそのロシアの風景の描寫に在るのである。譬へば、彼は彼が少年であつた時分の魚釣りの日の精妙なる回想を書くのである。

フェットの詩想の本質を、マイコフの完固たる可塑性に比較すると幻惑的である。彼の抒情詩の表現するのは朦朧たる夢と印象とである。デリケートな色と蔭とが顛動し、そして眞珠の様に軟いその詩を横切つて疾飛するのである、また彼の幻想は薄紗の糸のやうにデリケートであり、言葉と音樂との間の境界に住み、そして夫の地獄の縁(洗禮せざる兒童、白痴、異教徒乞食等の死後魂の迷信する所)の漠たる反響を捉へるのである。

「静かなる夢飛び立つが如く、

暗の世は滑り行き、

アダムの如く、我はエデンに横はる

唯一人、夜と對ひ合ひ、」

彼は乾草の中の南國の夜に就いて歌ふ。或はまたその夜明に就いて歌ふ——

「私語、吐息、戦き、

鶯の顔色、

銀色の光、はたわななき、

また陽の足跡。

かの夜の輝きまた夜の蔭、

極みなき行程のうち、

迷はしき異動、飛來また飛來

愛されし者の面に。

バラの花の血は疼く雲の中、

してかの灰色の中の一閃光、

して泪と接吻と混りつ——

夜明、夜明、白日！

ボロオンスキイの詩を、フェットの淑かな快樂派的の性質に比較するとそのデリケートな半音と幻感的なさゝやきとは、一層酷烈なる要素を以て作られたものであり、またマイコフの彫塑的型に比較すると、それは明かに音楽的であつて、また一つの美しいそして魅惑的な個性を反映するのである。彼の題材の地域は廣大である。彼はハンズ・アンデルセン (Hans Andersen) のやうに透明で單純なる子供の詩を書くことが出来る——彼の太陽と月との間の會話に於ける如く——或はかの「グリースのものなりし光榮」を想出させることが出来る、丁度その詩の中で彼の「アスバシヤ」がベリクレスを喝采する群衆を容れて、非常なる喜悅的懸念で彼の歸りを待つてゐる如き——即ちその清新に對してはブラウニングが (Browning) またその音律に對してはスキンバーン (Swinburne) が

嫉んだであらう所の一つの喚起である。

併し乍らマイコフ、フェット、及びボロオンスキイは、その作物の多くが精妙であつたが、彼等は自分の領域に於てさへもネクラゾオフの才幹の一切のものを産まなかつたのである。それは即ち彼等の中の一人として、ネクラゾオフがその幻惑的原野に在つたやうな、藝術的原野に於ける偉大さを有たなかつたからである。彼と比較しては彼等は劣れる詩人である。此の時代に他の原野に於て、ネクラゾオフと競争者となつた所の一人の詩人がある、それはアレキシス・トルストイ伯爵であつて、彼も亦高踏派の一人であり幻惑的文學から高く上に置かれてゐるのである。猶ほ彼はグヅマ・ブルツコオフの雅號でロシヤでは家族の格言となつてゐる一つの諷詩、俗説集を書き、また至上に簡潔なそして機智に富んだ諷刺詩でロシヤの短い歴史を書いた。その諷詩と同様、彼は一つの歴史小説「セレブリヤンニイ公爵」及び尙ほ一層重要な、かの暴虐王イヴンに就いての、ロシヤ史の中でも最も劇的な時代を取扱つてゐる三段物の劇を書いた。その三段物は「暴虐王イヴンの死」、「フィオドル・イヅアノフィッチ帝」及び「ボリス帝」より成る詩で書かれてゐる。彼等その劇に動いてゐる者の凡ては、當今の模範的演藝目録の持場を形造つて居り、舞臺に演ぜられると

きは効果ある印象的なそしてまた心を奪ふものなのである。

併し乍らアレキシス・トルストイが最も一般に知られてゐるのは、詩人及び抒情詩人としてである。變通の才を有つた多藝はプウシュキンを想ひ起させる。彼はロシヤ、南部及びスコットランドの主題に就いての史詩的民謡及びドン・ジュアン、セント・ジョン・ダマシイン及びマダラのマリヤに就いての劇詩を書いてゐる。そして是等の傍、彼は魅惑と敏感と歌と色彩とで満ちて居り、型に於て調和的で透明なる所の、一つの自分親らの抒情詩大系を書いたのである。プウシュキン以來如何なるロシヤの詩人でも、斯くの如き柔しき愛の抒情詩を書いたものはない。また誰も斯くの如き淑しき抒情詩風でロシヤの春を、ロシヤの夏を、そしてロシヤの秋を歌つたものはないのである。羊齒がまだ繁然と捲いてゐる、朝未だ羊飼ひの音調が半分位しか聞えない、そして樺の木が今緑になつた、淺い春に就いての彼の詩は、世界の文學中에서도朝、春、露及び黎明の最初の愛についての最も淑しき、新鮮なそして完全なる表現の一つである。彼の歌はチャイコフスキイ及び他の作曲家を靈動させたのである。彼が最強且つ最高の絃を打つたのはそのセント・ジョン・ダマシインの中である。これは威風、莊嚴なる哀感及び鳴り響く調律のためにダイス・イロオ(Dies Irae)「怒の日」讚美歌の名(ロオマ

時代に死人を祀る時歌ふ彌撒四書の第一の名」とさへ比較することの出来る所の、死者に對する莊
大なる挽葬歌を含んでゐるのである。

彼の風景の描寫は特殊的な魅惑を有つてゐる。次のものは一つの翻譯の試みである――

「小川の堰の傍の、

漁師の網の乾してある、

大通りの雪泥の車の轍を通り抜け

馬車はのろ／＼と進み行き我は夢見る。

我は夢見る、また我は見る大通りを

憂鬱なるまた灰色の空を、

傾きつゝ昇り行く雲雀を、

また遠き彼方に捲く煙を。

その堰の傍に、麗しき顔を有ち

襤褸を被ひ、瘦たせる一人の猶太人歩めり、

その水は泡と沫との雷鳴を有ち、

その堰の上を走る。

彼方なる一人の少年は、

自ら作れるつが笛を吹きつゝあり、

と鴨は驚き眼醒めて

湖より見渡しながらに鳴きぬ。

また古き水車の近くには數人の労働者

緑の土の上に坐して在り、

囊を載せし車をつけて、二輪馬車の馬は

懶けの音をしてのろ／＼と過ぎりぬ。

我はもと此處に來たりしことはなけれど、
彼方なる彼の家の屋根、

また彼の小供、またかの森も、また堰も
そはなべて親しげに思はる。

またぐる／＼と鳴る水車の音、

また彼の壊れさうなる納屋を、我は知る

嘗つては我此處に在りて既にこれを見たり、

してそれをみな長き昔に忘れたるなり。

こゝなるまこと同じ馬同じ響もて

彼の囊を引きつゝありき、

また彼の同じ勞働者達

土の上の脆けたる水車の傍に坐しつゝありき。

また髭を有てる彼の猶太人我を過りて歩み行きぬ。

またかの水はその堰の中を通りて騒げぬ。

さなり、みなこれは興りたるなり

されど何時はた何處なりしかを我は告げ得ず。」

世はまた此の時期間に一人の詩人を生み、そしてコオルツフの繼嗣者をニキイチンの性格の中に與へたのである。彼の題材は直接に生活より捉られて居り、彼はクリミア戦争間に書いたその愛國的詩歌を通じて知られるやうになつたのである。併し彼は自然に就いて、廣野の日没に就いて、或は黎明或はがた／＼と廻る水車小屋の中の燕の巢に就いての描寫に於て、最も成功してゐるのである。二人の外の詩人で、その作品が後になつては能く知られるやうになつたが、六十年代には絶體的に注目されずに通つて仕舞つたのは、哲學詩人スルチエフスキイ——その詩は描寫に於て卓越してゐて、型式に於て不器用と認められる——とアブウクチンとであつて、彼は千八百五十九年に書

き初めたけれども、その詩集及び民謡は千八百八十六年まで發表されなかつたのである。アブウクチンは高踏派の一人である。彼の作品の大部分は形式に於ては完全であるけれども、興味のないものである。併し乍ら彼は何れのロシアの「Golden Treasury」の中にも一つの地位を有する所の、一つ或は二つの抒情詩を書いた、さうして現在では彼の詩は廣く讀まれてゐるのである。

八十年代に反詩的傾向に對する一つの反動が興つて、詩人が輩のやうに飛出し初めた。是等の中で最も通俗的で最も有名なのはナドソン（一八二一—七）である。彼は肺病で二十四の時に死んだ。それ以來彼の詩は二十一版を突破し、十一萬部が賣り盡され、十版は彼の生存中に公刊されたのである。そしてその抒情詩によつて多くの作曲家が作つた無数の音樂的作曲がある。彼の詩はロシア詩の新時代を堂々と開始して居るのであつて、その顯著なる特徴は型式と手練とに對する一つの偉大なる留意、色彩と外形に就いての高踏派の愛及び一つの深酷なる憂鬱である。

ナドソンは青年の憂鬱、青春の夢と幻滅の悲哀、及び彼が捉はれてゐる反動の激める雰圍氣に就いての絶望を歌つてゐる。此の最後の事實が幾分か彼の異常な通俗性を辯明してゐるのである。併し乍らそれは決してその全體の源因ではなかつた。彼の詩は唯單に精妙である許りでなく、不思議

に音樂的で、或る範圍ではそれは他の詩人達の詩をして一つの粗惡な粘土材のやうに思はしめるのである。また彼の自然に就いての、春に就いての、夜に就いての、そして殊にリイヴィラに於ける夜に就いての描寫は（情熱的なホオム・シツクの調べを有する）芳しき、人を酔はせる紫丁香花の麝香を有つてゐるのである。感覺的な、超デリケートな、病的な、神經質なそして厭世的な、斯くの如き詩は著しくその本質に缺陷を有つてゐなければならぬ。人は殆ど常につまらぬ語調に於て許りでなく、それと同様の語調なる、その暑苦しき抑壓的雰圍氣、そのデリケートな香氣、その慰勵なき幽暗及びその音樂に忽ち全く捉へられ勝ちである。何人もナドソン自身より以上に鋭くこれに氣付いたものはなかつた。で彼の最も美しき詩の一つは恁々云ふ風に始つてゐる——

「親しき友よ、我は知る、我は知る、我は唯知る、
餘りに良く

我が詩が凡ての力に乏しく、また
蒼白く、また纖弱きを、

されば時折まことその虚弱のために我は嘆く
また折節に夜の静寂に獨り泣く。」

そして他の詩の中で彼は自らの辯明を書いてゐるのである。彼は決して、詩を冗長を追ふ玩具として用ひなかつた。その詩人の有する祝福されたる天賦の才は、時に彼にとつて堪えられない十字架であつた。そして時に彼は沈黙を守ることが誓つたのである。併し乍ら若し風が吹いたならばエオリヤの豎琴は之に應ずることを必要としなければならぬ、また若し太陽が山頂の雪を溶したならば丘々の流れは谿谷に突流せずには居られないのである。この辯證は一切の批評以上に彼の才賦を説明する。彼の天性は一つのエオリヤの豎琴であつて、それは、それがしやうがしまいが微風に對しては感覺的である。彼の弦は僅かである。そして一つの音調に響く、されどもそれが嗚咽せる旋律のあるものは、夫の精氣的魔術と同様なる演奏の特性を帯びてゐるのである。

ナドソン以後に來る詩人は現代に屬する。そこには澤山居る。そして彼等は年毎に數に於て増加してゐる。所謂「デカダン」派はシェリイやヴェルレーン (Verlaine) 或はフランスの象徵派によつ

て感化された。併し乍ら彼等の詩には、その語の普通の意味に於ける衰微と云ふものは何物もなかつたのである。彼等の勢力は永續してゐるものではないかも知れない。併し乍ら彼等はロシア文學に於ける代理者であり、また彼等の或るもの、ソログウプ、ブルウソフ、バルモント及びイヴァノフは何派でも喜んで要求する所の作品を産んだのである。これはまた、現在するロシア詩人の中でも最も精妙なる一人であると同時に、最も獨創に富める一人なるアレキサンダー・ブロックに就いても事實である。

結 論

ツルゲネエフとドストイェフスキイの死を以て、大ロシア文學時代は一結末を告げた。文學の時代は政治と同じく停滯を初めた。そしてそれは日露戦争まで続いたのである。これに革命運動が次ぎ、それが變じて政治的渾沌と同じく文學上の渾沌を産み、その結果とそれが運んで来た難多な反動とは今尙ほ影響してゐるのである。若し人が先の時代が生産したものの質量を考へるならば、文學上のロシアが當然一休息を要求すると云ふことは全く自然なことなのである。

それであるからして、その不振の時期が産んだ顯著な作者は、五指を以て數へることが出来るのである——チエホフ、ガルシン、コロレンコオ及びその時期の最後に於けるマキシム・ゴオルキイ及

結 論

び彼等より離れて彼自身の傍系のメレヅコフスキイと。此の中でもチエホフとゴオルキイは他者の上に聳へてゐるのである。

チエホフは中産階級とインテリゲンツィアを描くことによつてロシア文學の範圍を擴大し、ユモアの調子をロシア文學に持ち返つたのである。またゴオルキイは大きな町や街道の放浪者、職人、乞食、泥棒、漂流貨物、投荷等を描くことによつて、また新しい文體に於て描くことによつて、一時に新しい境地を破つたのである。

ゴオルキイの作品は一つの啓示として、英國に對するルディヤード・キップリング氏 (Mr. Rudyard Kipling) のそのやうになつて來たのである。彼の主題は常に從來夢想されなかつた領土への門戸を開いたのみならず、彼の人生に對する及び彼の主人公達の人生に對する態度は、彼の到來以前の凡ゆるロシア小説家のそれとは異つてゐるやうに思はれた。併し彼と彼の先驅者との間の相異は初見の時に見るやうに、しかく大きなものではないのである。彼の荒々しい、御しがたき主人公達は、ハムレットを演じ或は人生の解決を慈善や謙讓或は謙遜に見出す代りに、復讐を以て適者生存とする即ち頑固な拳固や鋭利なナイフを遺風とするバルチザンである。而も是等の新しい主人公達

は、實際に我々がバザロフからピイター大帝に戻つて、ロシア文學史を通して見るときその主人公達の存在は、ピイター大帝をロシア人の國民性の一つの成分とする批評を立てた、ロシアの舞臺の半分以上で既に見て來た強硬なる型とそんなに異つてゐるものであらうか。

バザロフを、或はレルモントフを、或はピイター大帝をもさして置きゴオルキイの裸足の英雄をとらへて見よ。

ゴオルキイが何か絶體的に新しいものを創造する所は、彼が叙べる所の境界或は生活様式に於てであり、その方法で彼はそれを描述するのである。これは特に彼が自然を取扱ふことに就いて眞理である。初めて吾々はロシア散文學に於ける傳統の「正教」の描景から離れてその要素と直面してゐるのである。我々は宛も新しき空氣の氣息が文學に入つたかの如く感ずる。我々は十八世紀に英國に於てウオズウォースやパイロンやシェーリイやゴルリツヂが書き初めたときに、詩人達が感じたに違ひない所の、自然を取扱ふ様式に人々が慣れてゐるやうに感ずる。

チエホフは老巧な立場にあつて働いた。その世界は異つたものであるけれども、彼はツルゲネエフより直接にやつて來たのである。彼は或るロシア人がある時云つたやうに、ヴィント「橋の古い

型」でロシア自らが死なんとして居つたとき、他の如何なる作者よりも多く、また如何なる作者よりも良く不振の時期を色彩したのである。

彼の作品の調子は黯い、そして事實トルストイが云つたやうに、その高い調子の缺無と同様その客觀的寫實主義なるによつてかの寫眞師のそれに似てゐるのである。而も若しチエホフが寫眞師であるならば、彼は同時に明暗に於ける優秀なる技術師である。そして彼の厭世觀は他の二つの事實即ちそのユーモアの感覺とその人格とによつて消されてゐるのである。若しさうでなかつたら、彼の集合舞臺の商人や學生や扈從や宿屋の亭主やウエターや學校の教師や官吏や僧侶や公吏等がその間で爲出かす所の悲惨なことが多いので、人はその悲惨を避けるに堪えられぬであらう。チエホフの最も興味ある作品のあるものは舞臺に上演するために書いたものであつて、その劇の下題「叔父ワニヤ」と云ふのは、彼がまたそれに田園の生活の場景を取入れたものである。そこには吾々が彼の小説に見ると同じやうな灰色の、疲れた、温順でそして弱い人々即ち、希望に乏しい思想の破産者が居る。併しながらその代りにチエホフのデリケートな生々と氣息する寫眞は舞臺に上せては効果があつた。故に彼の特殊的才賦である所のその寮圍氣の内容を齎すためには、非常に特殊なる演出法が必

なのである。

幸運にも彼はモスコウの藝術座に於て、確實にその正しい手練とその獨特の取扱ひとに遭遇したのである。

チエホフは日露戦争が初つて間もなく、千九百四年に死んだのである。ロシアの小説及び散文詩の主流及び傳統から離れて、メレヅコフスキイは独自の境地を占めてゐる。その境地は批評主義と幻想的歴史小説との間にあつて、或る點に於ては——併し他の點は全く異つてゐるが——ウオター・ベエター (Walter Pater) の英國小説に占めてゐる所と似てゐる。彼の最に能く知られてゐる作品、少くとも歐羅巴に於て最もよく知られてゐる作品は、散文の三部作「神々の死」(「背教者ジュリアン研究」)「神々の復活」(「レオナルド・ダ・ヴィンチの話」)及び「反基督」(「ピイター大帝とその息アレキシスとの話」)で、これは殆んど凡ゆる歐羅巴國語に翻譯されて居り、この三部作は幻想的歴史改構の一論文なのである。それは眞の深い教養を證明して居り、過去の場面を生かしめる所の幻想的インスピレーションの囚光によつて、常に光を點じたのである。それは暗示的思想を以て生きてゐる。併し乍らその中にゲエテ或はベエターとの接觸と同じくバルウア・リットン (Bulwer Lytton) との接觸が

あることは、全體を通じて明かでない。メレヅコフスキイは蓋しその純粹な批評的作物に於ては更に成功してゐるのである。彼のトルストイ、ドストイエフスキイ、ゴオルに就いての著書は、その歴史的小説に於けるよりも遙かに刺戟のある、暗示的な、そして獨創的なものであり、また云ふ必要はないことであるけれども彼の批評は遙かに一小部分の民衆に響へてゐるのである。彼は如何なる點に於てもロシアの近代作家の中で最も光つてゐる興味ある一人であり、また多分ロシア以外で最も能く知られてゐる一人なのである。

日露戦争の間にその顯著なる作によつて名を成した一小説家がある。即ちクウプリンで、彼はその小説「決闘」の中に戦線に於ける一士官に就いての迫眞的で巧妙な生活の描寫をしてゐる。それ以來クウプリンはその初期の作品の期待を保持して來たのである。それと同時にレオニッド・アンドレエフが短篇小説、戯曲、戦争の描寫(「赤き笑ひ」)及びメエタルリンクに影響された教訓劇を持つて現はれた。それは透明で美しい文體であつて、その中ではその最後の一語までが厭世主義を語つてゐるかの如くに思はれる。千九百五年にその非常なる希望と覺醒と、一方に無政府の時期を、そして他方に壓制の時期を持つて革命運動が勃發した。一切の渾沌から文學と云ふよりも寧ろ書くこ

との渾沌が来た。そしてそれが變じて生活に於けると同じく文學に於て、これが一つの反動即ち一方象徴主義、審美主義、神秘主義に對する、そして他方唯物主義——學說ではなく實際の——に對する反動の連鎖を産んだ。併し是等多様な反動が今も續き明かに今日に影響してゐる以上、千九百五年の革命運動はロシア文學への訣別の當然の時期であるやうに思はれる。千九百五年に新しき時代が初つた。であるからしてその時代が結局産み出す所を想像するのは、危険とさへする位に餘りに早やすぎるのである。

吾々がロシア文學の記録を振り返つて見るとき、若し他國の文學のことを思ひ出すならば、第一に吾々を打たなければならぬものは、その比較的短い生命である。ロシア文學には中世紀もヴィロン (Villon) もダンテもチヨウサア (Chaucer) も文藝復興も「大時代」もない。文學は十九世紀に初つてゐるのである。第二に多分吾々を打つものは、その存在が凡ゆる文學中で最も若いにも係らず、それが形而上的には最老であるやうに思はれることである。或る點に於て、それは成熟に達する前に過熟した觀がある。併し乍ら思ふに此の中にその偉大たる秘密があり、これが人類の心に對するその貢獻の價值なのかも知れない。それは——

「悲哀に於て古く而して悲哀に於て非常なる明智」
なのである。

そして人類に對するその主要なる貢獻は、無比なる自然さと眞摯さとを以て或はその悲哀とその明智について比類なき——凡ゆるロシア文學は、散文或は詩の何れに於ても現實性に立脚してゐるのである——所の眞實の愛を以て作られたる一つの表現であつて、その悲哀と明智とは、一つの偉大なる心即ち、世界を抱く充分の大きさのある、而もその同情その友愛その慈悲その慈善及びその愛とを以て、その中に凡ゆる悲哀を溺らしめるに充分の大きさのある心より來るのである。(完)

年 代 表

- 一一一三年。ネストル年代記
- 一六九二年。ロシヤに於ける最初の戯曲作らる
クレゴリーイ。
- シモン・プロツキイの「放蕩息子」
演ぜらる。
- 一七〇三年。ロシヤ最初の新聞「ロシヤ新聞」現
はる。
- 一七二五年。ピイター大帝の死。
科學大學の創立。
- 一七四四年。カントেমイルの死。
- 一七五〇年。タテイシユチェフの死。
- 一七五五年。モスコウ大學創立さる。
- 一七六二年。ガザリン大帝の登位。
- 一七六五年。ロモノゾフの死。
- 一七九〇年。ラディシユチェフの「ロシヤ紀行」發
表さる。
- 一七九六年。カザリン大帝の死。
- 一八〇〇年。「イゴル皇子侵入物語」第一版發表
さる。
- 一八〇二年。ヅウコオフスキイ、クレイの「挽
歌」を翻譯す。
- 一八〇六年。クリロオフの最初の寓話發表さる。
- 一八一六年。ダルツハアヅインの死。
カラムザンの「ロシヤの歴史」發
表さる。
- 一八一九年。セント・ピイタースブルグ大學創

立さる。
 一八二〇年。プウシユキンの「ルスランとミラ」発表さる。
 一八二三年。クリホオイエドオフの「惻好の災難」同覽さる。「イフゲネエオ・ネエギン」の第一篇發表さる。
 一八二五年。十二月黨の企劃。
 一八二六年。リレーフ絞殺さる。
 一八二七年。プウシユキンの「ジブシイ」發表さる。
 一八二九年。クリホオイエドオフの死。プウシユキンの「ボルタヴァ」發表さる。
 一八三一年。プウシユキンの「ボリス・ゴドノ

フ」發表さる。
 「イフゲネエ・オネエギン」の全篇發表さる。
 一八三二年。ゴオゴルの「デイカンカに近き田圃の夕暮」發表さる。
 一八三四年。ゴオゴルの「ミルゴロツド」發表さる。
 一八三五年。ゴオゴルの「檢察官」上演せらる。
 一八三六年。チアアデエフの著作發表さる。
 一八三七年。プウシユキンの死。
 一八四一年。レルモントフの死。
 一八四二年。ゴオゴルの「死せる魂」發表さる。
 一八四四年。クリロオフの死。
 一八四七年。ゴオゴルの通信發表さる。
 ツルゲネエフの「獵人日記」發表

さる。
 一八四九年。ベリンスキイの死。
 一八五〇年。ドストイェフスキイ投獄さる。
 一八五六一七年。サルチヨフの「州の小品」發表さる。
 一八五九年。オストロフスキイの「嵐」作らる。
 一八六〇年。ゴンチャロオフの「オプロモフ」發表さる。
 一八六一年。農奴解放。
 一八六二年。ヒゼムスキイの「恐怖の海」發表さる。
 一八六三年。チエニイシエフスキイの「何が爲

さるべきか」發表さる。
 一八六五年。レスコオフの「出口がない」發表さる。
 一八六五年―七二年。トルストイの「戦争と平和」現はる。
 一八六六年。ドストイェフスキイの「罪と罰」發表さる。
 一八六八年。ドストイェフスキイの「白痴」發表さる。
 一八七五年。アレキシス・トルストイ伯の死。
 一八七五年―六年。トルストイの「アンナ・カレニナ」發表さる。
 一八七七年。ネクラゾフの死。
 一八八一年。ドストイェフスキイの死。
 一八八三年。ツルゲネエフの死。

- 一八八六年。オストロフスキイの死。
- 一八八七年。ナドソンの死。
- 一八八九年。サルチヨフの死。
- 一九〇〇年。ソロヴァイエフの死。
- チエホフの Chitka (鷓) 生る。
- 一九〇四年。チエホフの「櫻の園」生る。
- チエホフの死。
- 一九一〇年。トルストイの死。

概観露西亞文學史

定價壹圓十八錢

翻譯者

坂間

昇

發行者

東京市本郷區弓町二ノ三至上社
中川徳太郎

印刷者

東京市下谷區池之端七軒町三七
上野喜一

發行所

東京市本郷區弓町二ノ三
至上社

振替東京六七八八二

發賣所

(錦町) 慶文堂

IT 5F-68

オットオ・ブラウン著
京口元吉譯

歴史哲學概論

四六版總布表裝
百六十五頁
定價壹圓參拾錢
送料拾貳錢

本書は瑞西バアゼル大學の哲學正教授 Dr. Otto Braun の „Geschichtsphilosophie“ 1921 を譯したものである。この名著は、博士がバアゼル其他の大學に於ける講義を基礎とし、初學者のために歴史哲學の入門書たらしめんとして書かれたるもので、博士の該博なる智識と明晰なる頭腦とは廣く歴史哲學の諸問題に亘り、よくその要を傳へ讀者をして平易明確に歴史哲學の何たるやと歴史哲學發達の大勢を理解せしむ。譯者亦早稻田學府にありて哲學の研鑽に没頭しつゝある士、その一字をも忽せにせざる譯筆は、原文の意を最も平明適確に傳へたる名譯として信ずるに吝ではない。

- 第一章 歴史哲學の本質と課題
 - 第五節 現代
- 第二章 歴史哲學の歴史
 - 第三節 歴史哲學の認識論的研究
 - 第一節 歴史學に關する學說
 - 第二節 歴史的認識論
- 第三節 獨逸觀念論及びその創始者と繼承者
 - 結論及將來の概観
- 第四節 實在論
 - 附、引用書目

終